

Title	台湾故宮博物院所蔵楊守敬觀海堂旧蔵室町時代鈔本「論語集解」について
Sub Title	A study of "Lun yu ji jie (論語集解)" copied in Muromachi (室町) period relating to Taiwan National Palace Museum (台湾故宮博物院) possession of Yang shou jin (楊守敬) collection
Author	高橋, 智 (Takahashi, Satoshi)
Publisher	慶應義塾大学附属研究所斯道文庫
Publication year	2006
Jtitle	斯道文庫論集 (Bulletin of the Shidô Bunko Institute). No.41 (2006.) ,p.115- 163
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00106199-20060000-0115

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

台湾故宮博物院所蔵 楊守敬觀海堂旧蔵
室町時代鈔本「論語集解」について

高橋 智

緒言

本論は、『斯道文庫論集』第四十輯に掲載した「室町時代鈔本論語集解の研究」のうち、序論・総論を前提に、各伝本の具体的な調査研究を述べる各論に属する一編である。既に、総論で解説したテキストの分類に従って、各所在本の順次解題を行うのであるが、台湾の観海堂本は、他の伝本と異なり、蔵書流通の意義からしてもこれを分散させて説明するべきではなく、永久に一括して論じられるべきものであろうから、ここに敢えて観海堂本の一章を設けることとしたのである。筆者は、平成十八年二月十日より同年三月三十一日まで（財）日台交流協会・日台研究支援事業（派遣）の助成を受け、元・故宮博物院文献処処長、現・淡江大学文献資源研究所教授呉哲夫氏のご指導のもと、台湾故宮博物院の楊守敬觀海堂本『論語』関係善本の調査を行うことができた。本論はその研究成果の一部を成すものである。

目次

緒言

序言

第一章

観海堂蒐集、室町時代鈔本「論語集解」の意義……………二九

一、蒐集と縁起……………二九

二、校書と「古逸叢書」……………三三

三、訪書後の整理と保存―「日本訪書志」「留真譜」……………三三

四、「論語」の蒐集……………三四

第二章

観海堂本、室町時代鈔本「論語集解」の解題……………四四

一、分類と特長……………四四

二、伝本略解……………四九

結語

序言

台湾故宮博物院に所蔵される楊氏觀海堂本は、清末、楊守敬（湖北宜都の人・一八三九〜一九一五）が森立之等を通じて購入した、日本の室町時代以前の、日本人による古鈔本・古刊本がその大きな特色となっている。その蔵書には、「飛青閣蔵書印」「星吾海外訪得秘笈」「宜都楊氏蔵書記」の蔵書印を捺し、每書の首に楊守敬七十歳の肖像（写真）を添える。楊守敬は金石・目錄・地理の三門に秀でた功績があったとされるが、とりわけ、中国に亡んで日本に古くから伝わっている古写本や古刊本を翻刻、「古逸叢書」と名付けて出版した功績が人口に膾炙している。それは、一八八〇年（清光緒六年・明治十三年）、駐日公使何如璋（広東大埔の人・一八三八〜一八九二）に召され来日し、日本の漢学者と交わり、日本に伝わる中国古典籍の奥深さに驚嘆し、継いで翌年来日した公使黎庶昌（貴州遵義の人・一八三七〜一八九七）に謀り、東京の使署にて上梓したものである。また、その際に楊氏は、当時の日本で盛んとなって漸く衰えるかに見えた古書研究の風を、一身に担っていた書誌学者森立之（一八〇六〜一八八五）に日本の書誌学を学び、自らも古書の蒐集に努めていた。当時、森立之は、狩谷掖斎・小嶋宝素・多紀藍庭・洪江抽斎等が営んだ江戸時代後期の古書研究会の成果を、善本解題書である「経籍訪古志」に纏める作業を終え、あるいは増補や図録の編纂を企図していたところである。楊守敬にとっては、願ってもない知遇を得たわけで、一八八四年（清光緒十年）の帰国に際しては、「経籍訪古志」に著録する数多の古写本や古刊本を梱包船載して乗船したのであった。民国二十一年

(一九三三)に編纂された「故宮所藏觀海堂書目」の袁同礼の序によれば、帰国後、民国四年(一九一五)七十六歳で世を去った楊氏の遺書は民国政府が三万五千円で買い上げ、一部を松坡図書館(一九一六年、袁世凱の帝制復活に抗した軍人蔡鍔を記念して梁啓超が設立した図書館)に分蔵し、主要なものは故宮の西側の寿安宮に移し、専用の書庫を設けて保存公開した。その後故宮の文物は政治の流れに押し流され、日本軍の侵攻を目前にして、民国二十二年(一九三三)北平から上海に遷すことを決定した。数ヶ月の間に五回に亘り、南京まで鉄道で運搬、一部を南京に残して水路上海のフランス租界に移送した。一六六七部一五九〇六冊の楊氏觀海堂本は、こうして北平から上海に移動した。そして、間もなく戦況急を告げ、民国二十五年(一九三六)には再び南京に戻り、道観・朝天宮に保管された。更に、南京の陥落に伴って、重慶・成都へと移動、巴県・樂山・峨嵋の三箇所に分かれて避難した後に、日本の降伏を期にして、民国三十六年(一九四七)ようやく南京に戻る事ができた。しかし、書物の運命はそれに止まることなく、翌年に南京中央博物院の設立を見るや、国共内戦の戦禍を避けて故宮の文物は台湾へと運ばれることとなった。民国三十七年(一九四八)から翌年にかけて二九七二箱の文物が台湾北端の基隆港に陸揚げされ、鉄路、台中へと運ばれた。霧峰県の北溝に新たな倉庫を設け、整理・展覽が企画され、漸く博物館事業が再開された。民国五十五年には台北の外双溪に建設された新館に遷され、ここに楊氏没後約半世紀を経て觀海堂本は安住の地を得て、書誌学界に異彩を放つ蔵書となって、現在は、故宮博物院図書文献館を代表する看板所蔵品となったのである。

第一章 観海堂蒐集、室町時代鈔本「論語集解」の意義

一、蒐集と縁起

楊守敬は、中国の蔵書家が宋・元の伝統的中国の古刊本を重んじる書物流伝のなかで、偶然の機会と出会いを得て、日本における古刊本・古写本に価値を見出し、歴史上稀に見る収蔵家となったのである。すなわち中国のどの蔵書家とも異なる性格の蒐集を行ったのである。自述の年譜「鄰蘇老人年譜」〔楊守敬集〕・湖北人民出版社・一九八八に所載）によれば、清光緒六年（一八八〇）四十二歳にして来日、忽ち森立之らと書話に耽り、翌年の二月には「日本訪書志縁起」（清光緒二十三年＝一八九七刊刻「日本訪書志」に附載）を記し、公使黎庶昌の賞賛をうけ、清光緒七年（明治十四年・一八八二）「古逸叢書」編纂の企図が起ったのであった。清光緒十年（一八八四）の帰国まで、「経籍訪古志」を手に入れて、そこに著録してある古鈔本を買い集め、また、官庫・寺院などの所蔵する、入手できない貴重本はそれを影写せしめ、そして、特に大陸で目に触れることのない稀観本（これを佚存書という）を覆刻出版したのであった。まさに、江戸時代後期の日本の書誌学者・狩谷掖斎（一七七四～一八三五）が実践した、蒐集・影写・校勘という書誌学を、継承した中国の大学者蔵書家であったわけである。

その「日本訪書志縁起」には、だいたい次のような記述がある。

「楊氏の家はもともと蔵書の趣向はなかったが、日本に来て、「未知佚而存者為何本」大陸に亡んで日本に遺った漢籍の多さに感動し、一年足らずで三万巻余りを手に入れた。その蒐集したものは、「経籍訪古志」に未著録のものも少なくなく、とりわけ、日本古鈔本は驚くべきで、経部の書が最も多く、皆、唐写本か北宋のテキストに拠っているものである。「七経孟子考文」がその古鈔本研究の始めであるが、山井崑崙が用いていない古鈔本はなお多く、これでは、日本の古刊古鈔本の全体を見ることはできない。また、日本の古鈔本には、「也・矣」などの虚字が多く、清の阮元はこれを日本人の妄補であるとしますが、実は、こうしてたくさんの実物に接すると、けして妄補ではないことがわかる。すなわち、唐・北宋テキストの原姿なのである。日本の漢学は平安時代に盛んであったが、徳川政権誕生まで戦乱が続いた。室町時代以前のテキストは信じるべきで、「古文孝経」を「四庫全書総目」が後世の偽作と言っているのは、日本の典籍の実情を知らないからである。日本の古鈔本は繭紙の丈夫なものを使い、土蔵に保存するので、よく年月の長きに耐えるのである。日本の漢籍収蔵は足利学校・金沢文庫を最古とし、宋本の大半はここにある。近世初、曲直瀬養安院が之につき、宋元版と朝鮮本を多く有す。以下は、狩谷掖斎を第一とし、楓山官庫・昌平坂学問所も彼には及ばない。最近では、市野迷庵・洪江抽斎・小嶋宝素・森立之が著名で、今次入手した善本は殆ど彼らの旧蔵に係るものである。日本の医家は博学で、喜多村氏・多紀氏など小嶋・森以外の医家で蔵書に富むものが多い。また、日本の古利は、高山寺・法隆寺など唐写本の系統に属する経典が頗る多い。しかし、日本は明治維新の際に漢学を重視せず、結果、故家の旧蔵書が売りに出され、あるいは、大陸に買い手を求めるもの、数千巻にも及んだ。数年前、蔡という姓の者が船一艘に書を積んで宜昌にやってきた。友人の饒

氏は宋版「呂氏家塾讀詩記」を手に入れた。その舶載書には宋元版が多く含まれていたという。今、何処に所蔵されているのだろうか。やや遅きに失したか、もう少し早く来日していれば。悔やまれる。私が日本で旧籍を買い始めると、漸く日本の好事家も古書に食指を伸ばしてきた。これは古書の蒐集にとつて喜ばしいことだ。また、「論語義疏」「群書治要」「古文孝経」「唐才子伝」「臣軌」「文館詞林」「難經集注」などの佚存書については最早有名ではあるが、これらも佚存というだけでなく、日本の古刊本古鈔本にはそれぞれ幾種類かの伝本があって、異同も少なくない。こうしたことも注意が必要である。

私が交際する収蔵家で嗜好を同じくし、最も親しいのは、向山黄村・島田重礼・森立之の三人である。

この「日本訪書志」に著録するもののうち、覆刻に急を要する最も重要な書は、単疏本周易・単疏本尚書・万卷堂穀梁伝・十卷本論語疏・蜀本爾雅・顧野王原本玉篇・宋本隸釈・台州本荀子・杜台卿玉燭宝典・邵思姓解・李英公新修本草・楊上善大素経・文館詞林十卷である。これらを彙刻した叢書は「士礼居叢書」「平津館叢書」にも劣らぬものとなる。他に釈慧琳の一切経音義百卷・釈希麟の統一切音義十卷は今力及ばぬが、後の偉業を待ちたい。』

この記述をもつてしても、如何に楊守敬が前述したような日本の漢籍流伝のエキスを理解していたかが伺われる。短期間にほぼ日本の漢籍収蔵の要点を押さえ、いち早くそれを集めようとした功績は、第二者の模倣できぬところであつた。

因みに、楊氏帰国直前、清光緒十年（明治十七年Ⅱ一八八四）、百部刷り上がった「古逸叢書」は、黎庶昌によって有力な識者に贈られたが、最も力添えをもらった森立之に送呈したものが斯道文庫に所蔵される。日本の上製美濃

紙に大型に刷られ、刻字・印墨精善にして目の覚めるような美しさである。

二、校書と「古逸叢書」

その「古逸叢書」の首に附された「敘目」によって、影刻した書名と底本についての梗概を挙げると以下のようである。

一、影宋蜀大字本爾雅三卷

「経籍訪古志」所載に京都高階氏蔵とある。五代蜀の国子監博士李鶚の書体を刻した北宋以前の蜀刊本の面目を伝えたテキストで、宋版は台湾故宫博物院に所蔵（張鈞衡旧蔵）されるが李鶚の署名は無く、日本の南北朝時代に渡来の宋版を覆刻したもの（五山版）が、いま、神宮文庫に一本のみ伝わる。高階氏旧蔵本もこの五山版であるが、現所在は未詳。楊氏は、高階本の影写本を入手して影刻したものである。末に清光緒九年の楊氏跋がある。「日本訪書志」にも著録するが、この跋とはやや内容を異にする。

二、影宋紹熙本穀梁伝十二卷

「公羊伝」と同時期に出版された余仁仲万卷堂宋刊本。「公羊伝」は中国国家図書館現蔵。本書の原本宋本「穀梁伝」は、金沢文庫本で、柴野栗山の旧蔵、蜂須賀侯の阿波国文庫にあった時に、狩谷榎斎と松崎懺堂が相謀って影鈔本を

作製していたものを楊氏は向山黄村から手に入れ、影刻した。「経籍訪古志」所載。その楊守敬批入によれば楊氏は原本未見という。「日本訪書志」に楊氏跋を所載。宋版は戦火に焼失した。

三、覆正平本論語集解十卷

単跋本（本論集第四十輯拙論の序論第一章参照）の覆刻。台湾故宮に觀海堂の一本が蔵される。この底本と同版であるが、故宮本は刊記の丁が削奪されている。また、卷七に同版の別本が補配される。中村敬宇の旧蔵。「経籍訪古志」の楊守敬自筆批入に「余得此書二部、以一部上本、仍蔵一部」とあり、一部は「古逸叢書」の底本として版下に用いたものである。本書の末と「日本訪書志」に清光緒八年の楊氏跋を所載。

四、覆元至正本易程伝六卷繫辞精義二卷

元至正九年（一三四九）積徳書堂の刊記がある。原本の所在は不明。本書の末と「日本訪書志」に清光緒九年の楊氏跋を所載。

五、覆旧鈔卷子本唐開元御注孝経一卷

日本享祿四年（一五三二）に三条西実隆が手写したものを、寛政十二年（一八〇〇）屋代弘賢が覆刻した。その版本をもとに、さらに覆刊したものである。「日本訪書志」に楊氏跋を所載。

六、集唐字老子經二卷

宋の晁説之の旧跋を有する老子道德經を日本の荻生徂徠派の儒者宇佐美瀧水（二七〇一〜一七七六）が、明和五年（一七六八）覆刻したものを底本にして、松崎懌堂校刻の、唐開成石經「五經文字」（唐・張參撰）「九經字樣」（唐・唐玄度撰）から經字を集字して編纂したもの。

七、影宋台州本荀子二十卷

宋淳熙八年（一一八一）台州（浙江省）軍州事唐仲友の刊語跋を有する宋版を覆刻したもの。原本は金沢文庫本で狩谷掖齋の旧蔵。その原本は「經籍訪古志」に著録あり。現所在が不明。たまたま島田篁邨（重礼）がその影写本を所蔵していたので、借りて影刻したもの。清光緒十年楊氏の跋を付す。その跋は「日本訪書志」所載。後に、「四部叢刊」にも再影印された。現在中国国家図書館に所蔵される陳澄中旧蔵の一本が本版と版式を同じくするが、彼は刊語跋もなく、此と刻工も異なり、同版ではない。

八、影宋本莊子注疏十卷

晋の郭象注に唐の成玄英が疏を加えたテキスト。十巻本のテキストは孤本。底本は静嘉堂文庫現蔵で、巻一、七、十のみ遺る。金沢文庫旧蔵本。もと、賜蘆文庫（江戸時代後期の幕臣・新見正路の蔵書）蔵本（「經籍訪古志」所載）で、一旦、散じた後、新見正路の孫旗山が再び買い戻した。たまたま、本書に欠けていた巻二の二十二葉を楊氏が市場で獲た（それらは現所在未詳）ので、旗山に所蔵本を売って欲しいと願ひ出たが、拒否されたので、旗山に借りて

石印の版下を作り、影刻した。欠けている巻三〜六は坊刻本を元に刻工木邨嘉平が宋版の字体に模倣して刻した。その後、新見家から再び散じ、向山黄村・松方正義・竹添井々を経て静嘉堂所蔵本となる。その原本宋版の末には、清光緒十年の黎庶昌跋、光緒九年の楊守敬跋を附す（「日本訪書志」に載せず）。

九、覆元本楚辞集注八卷辨証二卷後語六卷

宋朱熹の注本。十一行二十字の元刊本で、現在、幾種類かの同種版本が存在するが、本版と同版本が存在するか否かは確かでない。東福寺宝勝院の印があり、狩谷椽斎旧蔵で「経籍訪古志」著録。その原本は現所在不明。

十、影宋蜀大字本尚書釈音一卷

底本は咸豊の初（十九世紀半ば）、呉県の潘氏が影写したものの。原本は遺らない。「日本訪書志」によれば、黎庶昌の女婿張氏が之を得て刻入を希望したが、日本で得たものではないので、楊氏は反対した。陸徳明の旧を伝えたものではない、と「日本訪書志」で本書を批判的に解説している。

十一、影旧鈔卷子原本玉篇零本三卷半

梁顧野王撰、後の増改を加えない原本。日本に九部の残巻が伝わり、神宮文庫の延喜四年（九〇四）写本を除けば、皆唐写本と言われる。「古逸叢書」では、巻九（言部・辛部） 〓 田中光頭から早稲田大学現蔵、巻十八（放部・方部） 〓 藤田平太郎氏蔵、巻十九（水部） 〓 藤田平太郎氏蔵、巻二十七（糸部・索部） 〓 高山寺・石山寺現蔵の三卷半を

収める（高山寺本は得能良介の紹介による）。末に、清光緒八年の黎庶昌跋、清光緒十年の楊氏跋を付す。楊氏跋は「日本訪書志」所載。卷二十七は「経籍訪古志」所載。卷十八の部分は当時、柏木貨一郎の蔵書で、最初、石版影印法によって印刷したという。その初印本に楊氏が由来を記した抜き刷りが斯道文庫に所蔵される。その初印本を元に、更に版本に上木したものを「古逸叢書」に収入した。

十二、覆宋本重修廣韻五卷

宋・陳彭年等奉勅重修本。底本の宋本は「大宋重修」と題し、南宋初期の刊本（静嘉堂文庫、松方本）を南宋中期頃に覆刻したもので、同じ静嘉堂文庫に所蔵される陸心源旧蔵本と同版本である。底本の原本は、寺田望南が所蔵していたものを町田久成が手に入れ、楊氏は漢の古印数顆と之を交換して町田から手に入れた。石版影印し、後、木邨嘉平に上木を依頼した。その原本宋版は、潘氏滂喜齋に移り、今、上海図書館に所蔵される。末に、黎庶昌の校記「校札」を付す。楊氏の跋は本冊には付さず、「日本訪書志」に所載。また、清光緒十年に原本に記した楊氏跋は、「潘氏滂喜齋蔵書記」に収載する。本書の初印本封面は「古逸叢書之十」に誤る。

十三、覆元泰定本廣韻五卷

「経籍訪古志」に「金匱本」と著録する。原本はその後、李盛鐸の所蔵となり、今、北京大学図書館所蔵。楊氏跋文等なし。

十四、覆旧鈔卷子本玉燭宝典十一卷

隋の杜台卿が古代の歳事に関する事項を編纂した書。加賀前田氏所蔵（現尊経閣文庫所蔵）貞和五年（一三四九）写本を佐伯の毛利高標が写し取ったものが、文政十一年（一八二八）毛利高翰によって幕府に献上された。その影写本は「経籍訪古志」著録のもので、今、宮内庁書陵部蔵。経緯は不明だが、これをもとに影刻したものであろう。斯道文庫にその際の楊氏校正本が所蔵される。

十五、影旧鈔卷子本文館詞林十三卷半

唐・許敬宗編の総集。もと十卷。楊氏は、幕末金石家小林辰の編纂した「目録」をたよりに卷百五十六〜百五十八、三百四十七、四百五十二〜四百五十三、四百五十七、四百五十九、六百六十五〜六百六十七、六百七十、六百九十一、六百九十九を輯佚して刻した。末に清光緒十年楊氏の跋あり。「日本訪書志」にも収める。弘仁十四年（八二三）写本の影写本が伝わっていた。現在伝存本の詳細は「影弘仁本文館詞林」（昭和四十四年・汲古書院）の、阿部隆一博士の解説に詳しい。「経籍訪古志」は十卷を著録する。

十六、影旧鈔卷子本瑠玉集二卷

人物故事を分類した類書。宋代以降亡んだものと思われ、日本では「日本国見在書目録」に十五卷と著録して、古くから伝わる。原本は、名古屋の大須観音真福寺の現蔵。「経籍訪古志」著録。楊氏跋なし。

十七、影北宋本姓解三卷

宋邵思編の姓に関する類書。原本は国会図書館現蔵。数少ない北宋版。「通典」「文中子中説」（以上は宮内庁書陵部蔵）「重広公史」（尊経閣文庫蔵）「新彫入篆説文正字」（お茶の水図書館蔵）とともに、朝鮮高麗から伝わる北宋版。「経籍訪古志」著録、曲直瀬家懐仙楼蔵とある。楊氏の時、向山黄村（一八二六〜一八九七）の所蔵であった。「日本訪書志」に楊氏跋を収める（本書不載）。

十八、覆永祿本韻鏡一卷

宋張麟之撰の音韻書。川瀬一馬博士「五山版の研究」によれば、龍谷大学所蔵に享祿一年（一五二八）刊本があり、何本か現蔵する五山版は永祿七年（一五六四）刊の改正版である（また、これの江戸時代初期の覆刻本が流布している）。「経籍訪古志」は享祿本を載せ、永祿本を未見としている。楊氏の影刻本は永祿の刊記を有するもの。楊氏跋が「日本訪書志」所載（本書不載）。

十九、影旧鈔卷子本日本見在書目一卷

藤原佐世編の日本最古の漢籍目録。奈良室生寺本（宮内庁書陵部現蔵）が伝わり、その伝鈔本が多く伝わる。「古逸叢書」の黎庶昌序目によれば、この影刻本の底本には安井息軒（一七九九〜一八七六）の跋があったようである。高知県の青山文庫（田中光顕旧蔵）に同系の明治写本があり、「日本書目大成」（昭和五十四年・汲古書院）に影印されているものも同系の明治写本である。これらには嘉永四年（一八五二）の安井息軒跋、森立之の明治二・十二・十

七年（二八六九・七九・八四）の跋が転写されている。恐らく、安井・森の自筆跋が附されている伝本を楊氏が入手したのではないかと想像するが、いずれにせよ「古逸叢書」の底本は田安家旧蔵のもので現所在は不明。楊氏跋なし。

二十、影宋本史略六卷

宋・高似孫撰。史書の解説書。原本宋版は、内閣文庫所蔵。「経籍訪古志」所載。楊氏跋を末に刻す（「日本訪書志」所載）。

二十一、影唐写本漢書食貨志一卷

唐顔師古注本。日本人による奈良時代写本とも言われる。原本は名古屋大須観音真福寺所蔵。「経籍訪古志」所載。小嶋尚真が影写したものによって楊氏が影刻した。末に、楊氏の跋があり、「日本訪書志補」（民国王重民輯）に収載。

二十二、仿唐石经体写本急就篇

漢史游撰。「経籍訪古志」所載。天保八年（一八三七）洪江抽斎が校訂し、小島知足が唐石经に模して書写したものが上梓され、その版本を楊氏は覆刻したのである。楊氏跋なし。

二十三、覆麻沙本草堂詩箋四十卷外集一卷補遺十卷伝序碑銘一卷目錄二卷年譜二卷詩話二卷

唐杜甫の詩集。福建省の蔡夢弼による校訂出版。麻沙本の典型。黎庶昌の跋あり。楊氏跋なし。「経籍訪古志」著

録、海保漁村旧蔵。現所在未詳。傳増湘は原本を元刊本であろう、とする。

二十四、影旧鈔卷子本碣石調幽蘭一卷

琴譜。「経籍訪古志」所載。小嶋宝素旧蔵。宝素は京都の某氏より影写。その影写本を影刻した。原本の所在は西加茂神光院旧蔵で、現在は東京国立博物館所蔵。楊氏の跋なし。

二十五、影旧鈔卷子本天台山記一卷

唐徐靈府撰。原本は、国会図書館所蔵の平安写本。「経籍訪古志」未所載。楊氏跋なし。

二十六、影宋本太平寰宇記補闕五卷半

宋・樂史撰、地理書。乾隆の四庫採進本に欠けた、卷百十三〜百十八までを影刻した。末に、清光緒九年（明治十六年）覆刻の許可を求め、許可を下す、それぞれ黎庶昌と三條実美の往復書簡を刻す。また、楊氏跋を刻す（「日本訪書志」所載）。原本宋版は欠巻があるが、二十五冊。宮内庁書陵部現蔵。胡蝶装。「経籍訪古志」所載。

以上、二十六種類、すなわち、古鈔本九種、日本旧刊本（五山版）三種、宋版九種、元版三種、他二種の翻刻で、数百年來、日本に連綿と伝わり大陸に失われた秘籍を明らかにしたのである。これをもってしても、既に楊氏蒐集と調査の豊富さの一端を伺うことができるが、なおその蒐集の全体像は完全には掴みきれないほどである。

いずれにせよ、日本に流伝した宋版の研究や、日本の漢籍古鈔本の研究は、楊氏蒐集本の調査なくしては成り立たないことが、以上の説明から充分に察し得よう。

三、訪書後の整理と保存―「日本訪書志」「留真譜」

楊氏は清光緒十年、四十六歳で帰国し、民国四年（一九一五）七十六歳で京師に没するまで、日本で蒐集した珍籍の大部分を持ち続けた。湖北の黃州（黃岡市）で教諭を務めて母堂を養い、その間、黃州に「鄰蘇園」を築き、蔵書を安置した。城北に宋の詩人蘇軾が詠んだ「赤壁賦」の舞台があったことによる。地誌・書法・詩文の編纂を日課としながらも、清光緒二十一年、五十七歳で母堂を喪ってから、原籍の宜都（湖北省）とを往復することしばしばであった。そして、清光緒二十三年頃から、持ち帰った蔵書の本格的な点検と校書を開始した。虫損を補したり、表装を加えたり、校訂批入を書き入れる読書が続いた。同二十五年から、張之洞（一八三七―一九〇九）の招きで武昌の兩湖書院で講義を行った。同二十七年には妻を喪い、宜都に戻る。この年に「日本訪書志」と「留真譜」を完成させた（六十三歳）。これで、日本における蒐書の整理は一応の結論を見て、それ以後は「水経注」の研究に専念する。また、金石蒐集で知られる両江総督の端方（一八六一―一九一一）に招かれて、南京にも赴き、上海にあつては、金石・書法の名声も大いに上がった。

一九一一年の辛亥革命は、当時の蔵書家達を震撼させた。楊氏は上海でそれに遭遇したが、もはや出城はできなかった。しかし、上海の楊氏の家の門には、日本の寺西秀武の尽力で、楊氏の蔵書に手を掛ける者は罪に処される、とい

う張り紙がなされ、狼藉の進入を妨げた。黄州や武昌に置いてあった書籍も不安であったが、手の施しようがなかった。やがて、民国三年、大總統袁世凱（一八五九～一九一六）の招きで京師に移り、蔵書も順次、京師に運ぶことになった。そして、翌四年一月九日長逝し、蔵書の主要な部分は大北京に遺されたのであった。

一九一一年の十一月十一日、上海で記した楊氏の記に、「守敬は少壮より都に行き衣食を節して書を集め、日本にあつては、古碑・古銭・古印をもって古書に換え、字を書いて売り、それを元手に買い加えてきたものが今日の蔵書である。清初、錢謙益が祝融にあつて蔵書を失った二の舞とならぬように。この典籍が失われることは、私の不幸に止まらず、天下の不幸事である。」（自述年譜）とあり、いかにその蔵書に心を向けていたかがわかる。

没後、その遺志は守られ、北京にあつた蔵書は三万五千元で民国政府が買い上げることとなり、民国八年（一九一九）総統徐世昌（一八五五～一九三九）はその一部を松坡図書館に分蔵、また、主要なものは民国十五年故宮博物院が収蔵することとなった。そして、同二十一年、故宮博物院が「故宮所蔵觀海堂書目」を編纂したことは、冒頭に述べた如くである。これによって、楊氏蒐集蔵書の概観が掴めるようになったのである。その内、日本に於ける蒐集の源流は「日本訪書志」「楊星吾日本訪書考」（長澤規矩也・同著作集第二卷・一九八二・汲古書院）「中国訪書志」（阿部隆一・一九七六・汲古書院）によって知られ、王重民「日本訪書志補」も参考になる。その他、現在、北京中国国家図書館・台北中国国家図書館・上海図書館・湖北省図書館などに散在する旧蔵書の復元は、今後の研究課題である。

楊氏が纏めた解題目録「日本訪書志」、そして図録である「留眞譜」「留眞譜二」について、少しく補足しておこう。「日本訪書志」は、主として大陸に亡んで日本に遺った古籍善本二百三十一種についての楊氏序跋を集めたもので、清光緒二十三年（一八九七・明治三十年）の出版にかかる。首に清光緒二十七年の楊氏自序を冠す。全て十六巻で、

卷九・十に医書を配す。前述の如く、江戸時代後期、勃然と隆盛に至った書誌学の推進者が医家であったことから、日本に医書の善本が多いことは大きな特徴で、それを知らしめた意義は大きい。収載する善本は楊氏所蔵本に限らないが、所蔵者に関する言及が無いのを恨みとする。「留真譜」は清光緒二十七年刊本で、日本で蒐集した古籍や入手はできなかったが、一見した善本の、巻頭卷末刊記の書影を木版に刻した図録集である。全て三百九十三種、図後に楊氏の跋文を附載するものも多い。石印やコロタイプ印刷、まして現代の写真製版技術が流行する以前に、近代書誌学の重要な側面である版式の比較を可能にした意義ある書物である。もともとの発想は森立之に始まり、森が作製していた書影集を楊氏がもらい受け、巖谷脩や町田久成の助力を得て増修し、二十数冊を日本で上梓した。帰国後、更に増やし整理して分類、初編十二冊を出版した。凡そ、善本書影・図録と称するものの嚆矢である。掲載書は、現所在本との同定が困難なものも少なくないことが、やはり「日本訪書志」と同じく恨みとする。二編は楊氏没後二年を経た民国六年に上梓。百七十五種の書影を木版で刻した。これらの版刻技術は相当なもので、よく原本の面影を伝えるのに成功している。楊氏の努力は、こうして書誌学の発展に寄与し、これに続いて、書影が続々と出版され、書誌学者繆至孫（一八五四～一九一九）は「宋元書影」を石影印、常熟の瞿氏は「鉄琴銅劍樓書影」（民国十一年）、南京国学図書館は「益山書影」（民国十七年）、劉承幹は「嘉業堂善本書影」（民国十八年）、故宮博物院は「故宮善本書影」（民国十九年）「重整内閣大庫殘本書影」（民国二十二年）、陶湘は「涉園所見宋版書影」（民国二十六年）、王文進は「文祿堂書影」（民国二十六年）、顧廷龍・潘景鄭は「明代版本図録」（民国三十年）をそれぞれ石影印して、書影文化を築いたのである。また、「留真譜」の、こうした図録としての歴史的・書誌学的意義については、近年の書影編纂の最も優れた成果である「中国古籍稿鈔校本図録」（二〇〇〇年・上海書店）に載せられている上海図書館・陳先行

の「前言」に詳しく述べられている。

その概要を要約すれば、以下のものである。「古籍の鑑定は経験と実践によってのみ成果を生むもので、諸々の伝本を比較することが最も確実な鑑定の方法である。こうした一種、感覺的な力に頼る「觀風望氣」と称される熟練者の鑑定力は、しかし、容易に到達できるものではなく、藏書家など一部の、大量に版本を縦覧できる人だけが、その条件を持つ。「留真譜」はまさにこの限界を突破し、多くの人に宋元版・古鈔本の面影を提供し、古籍鑑定比較の資となることを目的としたもので、実用価値の高いものでもある。例えば、宋代、「考古図」などの図譜が現れることによって、俄に金石学が発展したように、「留真譜」の出現によって、書影を用いてテキストを直接比較する新しい書誌学が進歩することとなったのである。」

そもそも、楊氏が「留真譜」序文で述べるように、「留真」の一語は、「漢書」卷五十三「河間献王伝」に「民より善書を得れば必ず為（ため）に好く写し、之に与え、其の真を留（とど）め」とあるのにより、善書を献じた者には複本を作製して与え、原本は王府に収蔵したという故事に基づいている。「真」の意義が古代からしてみれば変化したとは言え、書物の散佚を防ごうとする精神は一貫していることを物語る藝林の好事である。

四、「論語」の蒐集

「論語」の我が国に於ける流伝の梗概は、これを見ると、宋版・五山版（旧刊本）・古鈔本が、室町時代までに使われたテキストの実態であり、「論語集解」の古鈔本は、博士家の流れを大きな流伝の柱としながらも、「論語義疏」

や正平版「論語」の影響も蒙りながら多々生み出された。

こうした実態を把握した楊氏は、これを実証するべく、原本の蒐集に精力を傾けた。楊氏の編纂した書目を調べる
と、

「日本訪書志」に見える「論語」は、次の四種類である。

- 一、論語集解十卷（古鈔卷子改摺本分爲四冊）
- 二、監本論語集解二卷 宋刊本
- 三、論語集解十卷 日本正平刊本
- 四、論語注疏十卷 元槧本

また、「留真譜」初編には、「論語集解」の古写古刊本として、次の十三種類について一―二葉の見本を影刻している。

- 一、津藩藤堂家蔵貞和二年（一三四六）奥書本を江戸時代後期に抽出摹刻したもの
- 二、貞和三年藤宗重奥書・応永九年（一四〇二）感得識語本
- 三、観応一年（一三五〇）奥書本、
- 四、元龜二年（一五七一）奥書本
- 五、正平版双跋本
- 六、慶長刊本（覆古活字版Ⅱ要法寺版か）
- 七、南北朝頃写本か

八、天文版

九、監本論語集解 宋刊本

十、元元貞二年（一二九六）刊本論語注疏

十一、室町時代写本論語義疏

十二、宝徳三年（一四五二）奥書本論語義疏

十三、宋朱熹撰論語惑問 朝鮮銅活字本の覆刻か

更に、「留真譜」二編には、「論語集解」の正平版・古鈔本を五点掲げ、見本を影刻している。

一、古鈔、(序) 八行、洪江抽斎・森立之の印あり

二、正平版・中村敬宇旧蔵

三、古鈔、(序) 十一行、洪江抽斎・森立之・向山黄村の印あり

四、古鈔、(序) 九行、和学講談所・向山黄村の印あり

五、古鈔、天文二十年清原枝賢校、松平定信・向山黄村の印あり

さて、これら著録本を検討してみよう。「日本訪書志」についてみると、

一、論語集解十卷（古鈔卷子改摺本分為四冊）

「留真譜」初編の七、観応一年（一三五〇）奥書本とおなじもので、楊氏が購得して、現在、台湾故宮博物院に所蔵される。

二、監本論語集解二卷 宋刊本

「留真譜」初編の九と同じで、楊氏購得後、李盛鐸に譲り、現在北京大学図書館所蔵。序の末に「劉氏天香書院之記」木記がある。内題は「監本纂叢重言重意互註論語」と題し、宋福建の坊刻本で日本では「重言重意本」として中期に珍重された。「北京大学図書館善本書録」（同大学・一九九八）に図を載せる。室町期の日本人学僧による古い朱点が施されている。四周双辺、十行十八字、匡郭内が縦二十・六横十三・二種と小振りである。孤本。

三、論語集解十卷 日本正平刊本

「古逸叢書」に収載した。それは单跋本で、もう一本無跋本を購得、現在台湾故宫博物院に所蔵される。「留真譜」五は双跋本で、「古逸叢書」本とは違うようである。初刻本を覆刻した双跋本は現在、東洋文庫・宮内庁書陵部・東京大学東洋文化研究所（安田文庫旧蔵）・静嘉堂文庫に伝本がある。

四、論語注疏十卷 元槧本

「留真譜」初編十の元貞二年（一二九六）刊本論語注疏と同じもの。これは現所在が不明。十三行本で、元貞二年平陽府梁宅刊の刊記があるという。曲直瀬家養安院の蔵印もあるという。現在、名古屋蓬左文庫に「元貞新刊論語纂図一卷論語釋文音義一卷 一冊」が存し、明代前期の覆刻本とみなされているが、これは楊氏が用いた元版の附録であったかも知れない。

次に「留真譜」初編について見てみると、

一、貞和二年奥書本

天保年間頃の模刻本があり、それを覆刻したもので、貞和の奥書ある実際の古鈔本は楊氏の時既に不明であった。現在も不明。「留真譜」に附された楊氏跋には「右古鈔卷子本論語集解、文字多与正平本合、出大和広瀬某家、後帰津藩侯有造館、天保八年津藩縮摹上梓者即此本也。相伝為菅原道真書、以第三卷末記有丞相二字、遂附会之。訪古志且謂、二字為後人所加。余未見原本、不敢質言、別得序文全篇及每卷首数行摹本、審其筆勢當為日本八九百年間人所書、復節刻之以為論語古鈔之冠。」とある。

二、貞和三年藤宗重奥書本

現在は東洋文庫所蔵。泉州堺の塩穴寺の旧蔵にかかり、かつて狩谷掖斎のもとにあり、「経籍訪古志」所載。市野迷庵がこれを校合し、慶長刊本に書き入れてあるものが、斯道文庫に所蔵される。南北朝以前の古写本は室町時代以降のものとして一線を画し、これを含め、正和四年（一三二五）写本（東洋文庫）、元応二年（一三三〇）写本（蓬左文庫）、嘉暦三年（一三二八）写本（書陵部）、建武四年（一三三七）点本（大東急記念文庫）、愛知県猿投神社蔵本など数点を数えるのみ。それを遡ると、醍醐寺本文永五年（一二六八）写本や高山寺本嘉元一年（一三〇三）写本などの零卷を存するのみとなる。「留真譜」に附された楊氏跋には「此書原是卷子、後改摺本、卷首有左中将藤宗重題字、故日本著録家称为宗重本。論語古鈔、梅尾、津藩二本外、此為最矣。旧蔵狩谷望之求古楼、今在岡山黄村家。」とあ

る。

三、觀心一年奥書本

楊氏の所蔵本で、台湾故宫博物院現蔵。「留真譜」に附された楊氏跋には「此亦卷子本、自卷首至雍也文字与諸卷子本略同。述而以下筆跡少異、所拠本亦不同、蓋雍也以前注中全列姓名、述而以後則有姓無名与邢本同。其句末也乎之矣等字亦大半刪削、故知所拠為宋槧本也。此本古宦漢・市野光彦皆未引及。余得小島学古校本（校於正平論語上）、故知其原委異同若此、其原本則未知今蔵何家、此面亦拠小島摹本也。」すなわち、この跋を為した後に本書を入手したものであろう。

四、元龜二年奥書本

楊氏の所蔵本で、台湾故宫博物院現蔵。元龜二年（一五七一）藤沢一寮の奥書本で、「留真譜」に附された楊氏跋には「是本每冊後皆有元龜二年題識、書估從西京販來、為杉本仲温所得、借而校之、大抵与正平本合也。」後に杉本仲温から得たもので、楊氏の言う如く、正平版の系統の「戊類」に属する。

五、正平版論語双跋本

楊氏は单跋本を入手、覆刻して古逸叢書に収載。また、もう一本を所蔵し、台湾故宫博物院現蔵。これは、刊記の部分の最後葉を意図的に削奪してあるので、单跋本か無跋本かの区別ができないが、いずれにせよ、双跋本ではない。

この「留真譜」に附された楊氏跋には「右重刊正平論語、逸人貫彼邦學者、亦未詳為何許人、驗其紙墨、當亦去正平不遠、格式雖仍正平之旧、文字亦略有校改、伝世尤少、余従書估借校一過、摹之如此」と。すなわち楊氏の入手できなかったもの。卷十の尾題「論語」に作る、所謂双跋論語本で、初刻及跋本の覆刻本である。

六、慶長刊本論語集解

拙論「慶長刊論語集解の研究」（斯道文庫論集第三十輯・平成八年）参照。古活字版か整版本かの区別はつかないが、恐らく、字様から推して整版かと思われる。整版の慶長刊「論語集解」は、慶長十年（一六〇五）頃、同八年以前に出版された古活字版を覆刻し、京都要法寺で開板されたもの（刊記がある。整版甲種）と、それを更に覆刻した整版乙種の二版が知られ、いずれも楊氏の入手するところであって、台湾故宮博物院に所蔵される。「留真譜」はこの何れかを摹刻したものであろうが、刊記がないところから、乙種かと推測される。

七、南北朝頃写本か

楊氏所蔵本。台湾故宮博物院現蔵。楊氏所蔵のうち、最も書写年代の古い「論語」写本。観応一年（一三五〇）写本。もと卷子本であったものを、折帖装訂に変えている。「経籍訪古志」「日本訪書志」（一）にも著録されている。「留真譜」に附された楊氏跋には「按此本自述而以下拋宋槧補鈔、則経注字数不応与正平本合、可知此是自宋相伝旧数、故各本因之、即正平本亦不必悉合、然則□校定諸本、此亦一大関目哉 守敬附記」とある。

八、天文版論語

天文二年（一五三三）刊、博士家清原宣賢の跋を有する単経本。泉州堺の医者と伝えられる阿佐井野家の刊行で、版木は堺の南宗寺に伝わったので、南宗論語とも称される。版木は太平洋戦争以前まで存し、大正時代まで刷られたが、室町時代の初印本は殆ど無い。楊氏は三本入手した。台湾故宫博物院現蔵。三本とも江戸時代の後印に属する。この「留真譜」もその何れかを摹刻したもの。

九、監本纂函重言重意互註論語二卷

「日本訪書志」（二）著録の「監本論語集解二卷 宋刊本」。

十、元元貞刊論語注疏解経十卷

「日本訪書志」（四）著録の「論語注疏十卷 元槧本」。

十一、論語義疏十卷 梁皇侃撰 室町時代写本

楊氏所蔵。台湾故宫博物院現蔵。楊氏は「論語義疏」古写本を七点購入している。ここに摹刻しているのは、卷一、四、七、八、の残巻本で、卷一は室町時代中後期写、卷四は江戸時代後期写、卷七、八は江戸時代中期写、という三種の取り合わせ本。卷一は楊氏蒐集「義疏」中、最も良い写本である。

十二、論語義疏十卷 梁皇侃撰 寶徳三年（一四五二）写本

存卷一〜二、七〜八。川越の新井政毅から島田篁邨にわたり、後、徳富蘇峰の成篁堂文庫所蔵となる。お茶の水図書館現蔵。「留真譜」に附された楊氏跋には、「論語皇侃義疏為海外逸書、真本無庸擬議獨怪、根本遜志所刊義疏、其体式全同閩監毛之邢疏本。按合注於疏、始於南宋、今所見十行本邢疏及元元貞刊本邢疏皆注文双行、安得皇疏旧本、一同明刊之式、此懷疑未積者、及來此得見皇疏古鈔本數通、乃知其体式迥異刊本、每章分段以双行、先積經文提行処皆頂格、注文則別行低一格、大字居中（亦有不跳行者則空數字疑是鈔取為之）其有所疏者、亦以双行積之、提行処並低一格、俱不標起止足知刊本之妄、且其文字為根本以他本及邢本校改者、亦失多得少、後有重刊此書者當拋此正之。」
「又按六朝義疏既有此式、何以唐人五經正義皆不循此轍、余疑皇疏原本亦必標起止別為單疏、今此□亦日本人合注於疏者之所為、而刪其所標起止與、惜此間鈔本審其紙墨筆勢、皆不出元明之世、無從実証之耳。」

十三、論語或問 宋朱熹撰

十三行と思われる半葉に、毎行二十二字の版式の、朝鮮版であろうか。その版種は不明である。

さて、「留真譜二編」（民国六年刊）について見てみよう。

一、古鈔、（序）の書影は八行

洪江抽斎・森立之の印あり。室町時代後期写本で、三冊。「経籍訪古志」所載。台湾故宮博物院現蔵

二、正平版無跋本

五冊。中村敬宇旧蔵。楊氏の所蔵にかかり、台湾故宮博物院現蔵。

三、天正四年（一五七六）写本

単経本、一冊。洪江抽斎・森立之・向山黄村旧蔵。楊氏の所蔵にかかり、台湾故宮博物院現蔵。天正四年の奥書を有す。書式からは、清家本とみなされるが、字句の点で清家本とやや異なり、経文の振り仮名傍訓は清家の読みとは違ふ。無論、「留真譜二」では振り仮名を削去してある。

四、室町時代写本「論語義疏」（序||何晏集解序）の書影を刻し、九行

五冊。和学講談所・向山黄村旧蔵。楊氏の所蔵にかかり、台湾故宮博物院現蔵。

五、室町時代後期写本、天文二十年清原枝賢校

松平定信・向山黄村旧蔵。本書は永正九年（一五二二）、一七年の清原宣賢奥書を有する、所謂清家永正本の系統で、天文二十年（一五五一）、宣賢の孫枝賢が奥書を加えたもの。「留真譜二編」には、「今存飛青閣」とあり、楊氏が所蔵していたことがわかる。しかし、原本は東洋文庫の現蔵である。五冊（1c1）。後、大阪府立図書館論語展覧会目録・財団法人大橋図書館論語展覧会目録に、ともに天文九年（一五四〇）鈔本と著録されたもの。

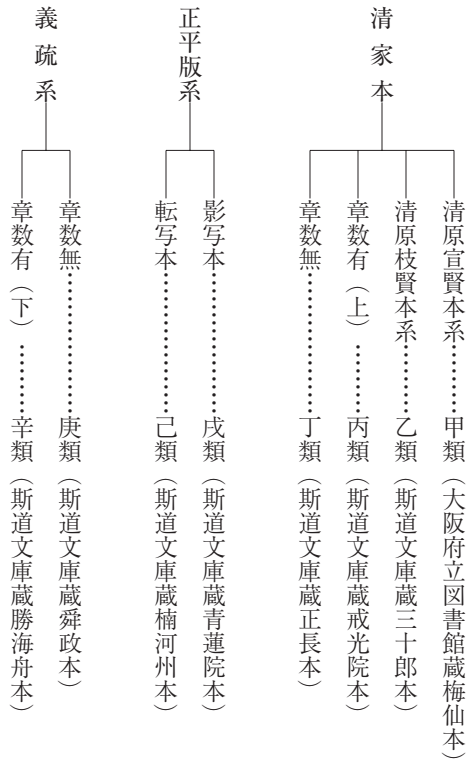
以上が「日本訪書志」「留真譜」「留真譜二」に著録された「論語」古刊古鈔本である。現在、台湾故宮博物院に所蔵される観海堂本はこれに著録されないものも多いが、楊氏の「論語」蒐集は、現存する全ての伝本から察しても、ほぼそのエキスを網羅した極めて重要な位置を占める、コレクションであると断定することができよう。

第二章 観海堂本、室町時代鈔本「論語集解」の解題

一、分類と特長

現在、台湾故宮博物院に所蔵される楊氏旧蔵の観海堂本「論語集解」は、室町時代写本が十点を数える。所在が明らかである伝本の全体数約九十点ほどであるのを鑑みれば、この所蔵が研究上大きな位置を占めることは誰しもが認めるところであろう。

さて、室町時代古鈔本「論語集解」の文献的分類は、拙論「室町時代鈔本論語集解の研究」(斯道文庫論集第四十輯・平成十八年二月を参照)に考察した如く、



と分類される。図版は前記『斯道文庫論集』を参照いただくが、要するに、清原博士家の家本の系統、正平版「論語」（正平十九年―一三六四）に出版された日本で最初に公刊された「論語」の影響を受けるもの、「論語義疏」（梁の皇侃撰、論語の注釈書で、早くから中国では亡び、日本では室町時代に流行した）の影響を受ける写本、と大きく三種類となる。そして、これらは、本文の字句の異同は勿論、巻頭の題署の仕方など明瞭に区別されるものである。

〔論語学而第一 凡十六章 何晏集解〕

子曰学而時習之不亦悦乎」

と始まるのが清家本甲種。その変化で、「説」を「悦」につくるのが丙種。また「悦」で「凡幾章」という章数が無いのが丁種。

〔論語学而第一 何晏集解 凡十六章

子曰学而時習之不亦悦乎〕

と始まるのが正平版系戊種。その変化で「学而第一 何晏集解 凡十六章／子曰学而時習之不亦悦乎」と始まるのが己種。

〔論語卷第一 何晏集解

学而第一〕

と始まり、続けて、学而一章を総括する義疏の注釈文が混入するのが、義疏混入系の庚類。

〔論語卷第一

学而第一 何晏集解 凡十六章〕

と始まり、同じく義疏の注釈が混入するのが義疏混入系の辛類。

これがざつと題署による識別である。

そこで、その観海堂本、十本をこの系統分類によって分類すると次のようになる。

(二) 丙類―清家本系、「悦」字、有章数(上)

A、論語十卷 魏何晏集解 集解単経本 天正四年(一五七六)写 十一行十七字 総振仮名 後補白表紙 一冊

(二) 戊類―正平版系

B、同 欠卷七・八

室町中期写 転写正平版 六行十三字 襦紙 四冊

C、同 存卷一・二

室町後期末期間写 六行十三字 濃丹表紙 一冊

D、同

元龜二年(一五七二) 藤沢一寮写 六行十三字 丹表紙 奉伊勢神宮 五冊

(三) 己類―正平版系、「悦」字、有章数(下)

E、同

室町後期写 八行十五字 三冊

(四) 庚類―論語義疏本系 無章数

F、同

永正十二年(一五二五)写 卷九・十享祿二年(一五二九)写 八行二十字 卷九・

十は清家系か 三冊

G、同 欠序

室町後期写 九行十六字 南葵文庫本と同種 足利学校系 五冊

H、同

室町末期写 八行十八字 栗皮表紙 念河藏書 二冊

(五) 庚類変型―論語義疏本系(義疏混入せず) 無章数

I、同 存卷一・二・九・十

室町後期写 七行十八字 朱色慶雲堂製本、原装は縹色古表紙 林学齋旧蔵 二冊

清家本から、正平版系、論語義疏系、とまんべんなく集まっているところも甚だ興味深いが、他の所蔵機関に見ない(五)の庚類変型は観海堂本のなかでも最も意義ある伝本と言えよう。義疏系でありながら義疏を混入しない伝本である。すなわち、系統図に見える舜政本の系統で、各巻の首題の下に「凡何章」という章数を加えず、

「論語卷(之) 第一 何晏集解

学而第一 (何晏集解)」

と題する型である。義疏系以外のテキストが

「論語学而第一 (凡何章) 何晏集解」

と題するのと明らかに区別されるものである。

ところが、義疏系のテキストは、当然、その分類名に言う如く、義疏の注釈が混入しているのであるが、観海堂本のI、J二本は、その義疏が混入していないのである。然らば、何故に義疏系に分類するのかと言えば、首題の形式や本文の字句等(例えば、「時習之亦不悦乎」のように「悦」に作る)から、そもそも論語義疏系のテキストから、煩雑を嫌ったのであろうか、混入された義疏を再び取り去ったテキストとして成立したものではなからうかと推測するからなのである。因みに、Jには、テキスト成立後、ほぼ同じ時期かと思われる書き入れが夥しくなされ、その際に義疏の、各章の内容を簡述した注釈などを、書き加えているのである。シンプルな写本のテキストに仕立てても、当時の読書人の傍らに、論語義疏が如何に常備されたものであったかを物語る資料であろう。いずれにしても、庚類変

型は、この二本のみを遺す系統で、観海堂本の存在によってのみ知りうるものである。

従って、こうした実例から、「論語」に限らず、観海堂所蔵本の研究無くして、日本の漢籍古鈔本・古刊本の研究は十全には至らないことが、把握できるであろう。

二、伝本略解

(一) 丙類

A、天正四年（一五七六）写 一冊

後補白色表紙（二五・五×一九・五cm）。その表紙に「天正鈔本論語」と後人の墨書がある。楊氏肖像を一葉加える。単経本で注釈は省いてある。首に何晏の序を挙げ、巻首は、「論語学而第一 凡十六章 何晏集解」と題し、本文が始まる。「子曰、学而時習之、不亦悦乎、有朋自遠方来、……」。書式は四周单边、有界、每半葉十一行、每行十七字、匡郭内二三・五×一五・五cm、界幅一・六cm、料紙は楮紙。本文書写と同時期の返点・送り仮名・縦点・附訓・朱句点を加える。本文は全巻一筆で略字が多い。室町時代後期の典型的な軟体の書写字様である。章数は「学而」篇の他に「八佾」「里仁」「泰伯」「公冶長」「述而」篇にあり、これ以外の篇には無い。また、「何晏集解」の文字も「為政」篇以下には記されない。尾題は巻一に無く、巻二以降は「論語卷第二」などと題する。本文の系統としては

博士家本から変化を吸収した丙種に属し、斯道文庫蔵戒光院本（前記『斯道文庫論集』第四十輯・拙論の「室町時代古鈔本論語集解所在表」を参照、各テキストの名称は、以下同様）に類するものと考えられる。訓読も「述而不作」を「述してさくせず」と読むなど、博士家本とはやや異にする。

末に、「天正四白 丙子 初冬七日不分烏焉馬任管城公写旃附与松木善五郎殿了」という本文同筆の奥書がある。蔵書印に「向黄邨／珍藏印」（向山黄村）「弘前医官洪／江氏蔵書記」（洪江抽斎）「森／氏」（森立之）、「星吾海／外訪得／秘笈」（楊守敬）、「教育部／点験之章」「中华民国七十九／季度点験之章」がある。「経籍訪古志」「留真譜二」に著録する。

(二) 戊類

B、室町中期写 欠卷七々八 四冊

後補纏色表紙（二六・七×一八・八cm）、楊氏が補った中国式の表紙で、各葉に襦紙が施され、包角を加える。原紙の大きさは縦二五・七cm。楊氏の肖像を添付。何晏の序があり、巻頭は、

「論語学而第一 何晏集解 凡十／六章」（凡以下は小字双行）と題し、本文初行は、

「子曰学而時習之不亦悦乎 馬融／曰子」（馬融以下は小字双行）と始まる。

書式は、無辺無界、每半葉六行每行十三字、字面高さ約二一・五cm。柱には何も記さず、ただ、每葉の上部に「一」とするしがあるが、これは字面の上限を書写時に目安として覚え書きしたものが。本文と同時期と思われる訓点（返

り点・送り仮名・縦点・附訓・濁点・朱のヲコト点を加える。紙質は薄手の楮紙で白っぽい。墨の滲みが遺る。この感じは、東京府中市の大国魂神社所蔵本（甲類）に良く似ている。尾題は「論語卷第一 経一千四百七十字／注一千五百一十三字」と経注字数を加える。毎冊尾に「正／庵」の鼎型印。また、「主正菊也」と朱書署名あり。「宜都／楊氏蔵／書記」（陰刻）「星吾海／外訪得／秘笈」（以上楊守敬）、点驗印二種あり。

書式や字句の異同から、正平版「論語」から出た転写本と判断できる。斯道文庫所蔵の青蓮院本の類である。ただ、「学而」最終章、「不患人之不己知」の一文に「王肅曰……」の注が無いなど、正平版に一層近い異同を示す。同じ戊類に属しても、青蓮院本がやや「論語義疏」の影響も受けているのに比べ、純粹である。

書写年代は、正平版「論語」の影写本が全体的に古く、室町時代の前中期の書写に係ると推定されるのに呼応して、文明年間（二四六九〜一四八六）を降らぬと推定するが、降っても、文龜永正年間（一五〇一〜一五二〇）であろうと考えられる。筆力には力があり、「はね」「はらい」には力が入っている、然るべき字人の手になるものと想像する。諸書目に著録無し。

C、室町後期末期間写 存卷一〜二 一冊

室町時代を降らないと思われる濃丹表紙。大きさは二八・五×一九・五cm。外題、「魯論」と墨書。楊氏肖像を附す。何晏の序を冠し、その題の下に「論語序 緒也／廊也」のような注釈を補筆する。

「論語学而第一 何晏集解 凡十六章」（凡以下は小字双行）と題し、本文首行は、

「子曰学而時習之不亦悦乎 馬融／曰子」（馬融以下は小字双行）と始まる。Bと同じ、正平版系の題し方である。

書式は、四周単辺、有界、每半葉六行、毎行十三字。匡郭内二二×一五・一cm、界幅二・五cm。柱には各篇の首葉のみに篇数を記す。本文・注に墨筆の本文同筆による返り点・送り仮名・縦点・附訓を加え、また、同時頃の朱引き・朱点・鈎点を附す。紙質は楮紙でやや明るい茶色、墨のりもよく、字様は軟らかい。独特の略字も多く、青蓮院本と同じ趣きを持つ略字が目につく。本文系統はBに同じ。正平版の忠実な写しに近い。尾題は「論語卷第一 経一千四百七十字／注一千五百一十三字」などと経注字数を添える。

蔵印に「問津館」「森氏」(以上森立之)、「星吾海／外訪得／秘笈」「京都／楊氏蔵／書記」(陰刻)「楊印／守敬」(陰刻)(以上楊守敬)、点驗印二種あり。

諸書目に著録無し。

D、元龜二年(一五七二) 藤沢一寮写 五冊

室町時代を降らない古い濃丹表紙はCと同様であるが、Cよりは新しい感じである。一般に、丹表紙は時代が古いほど色が濃い。恐らく、書写時の原装であろう。大きさは二七・二×一九cm。古い題簽に書き外題「韞鍔卷第幾(一〜五)」とある。韞鍔とは「論語」の異称に用いられる漢代以来の用語である。この外題の手は本文とは異筆であるが、同時期のものであろう。楊氏肖像を附す。何晏の序を冠し、首題は、

「論語学而第一 何晏集解 九十六章」と題し、本文首行は、

「子曰学而時習之不亦悦乎 馬融／曰子」(馬融以下は小字双行)で始まる。首行「悦」に作ることや、「学而」最終章、「不患人之不知」の一文に「王肅曰……」の注が無いなど、書式や字句の異同から、BCと同じく正平版論

語をほぼ忠実に転写したテキストと判断される。

書式は、四周単辺、有界、每半葉六行、每行十三字、匡郭内は二〇・二×一四・一cm、界幅は二・四cm。紙質は薄手の斐楮交漉紙で、斯道文庫所蔵・富岡鉄齋旧蔵・天文十八年写本に似ている。また、字様も軟体で、これも鉄齋本によく似ている。尾題はCと同じく、巻十まで存在する。書き入れ訓点は無く、わずかに、巻六に少々附訓があるのと、朱引き・朱点があるのみである。

每冊末に次の奥書がある。

伊勢太神宮奉納全部

極門二十五代時江州坂田郡七条之生 藤沢一寮

(第二冊以降には、「寮」字の下に「筆」字あり)

元龜二年八月二十八日

(花押)

本文同筆と思われる、これにより、元龜二年(一五七二)の書写本であることがわかる。現存本からの推定では、正平本系統古鈔本とその転写本は比較的時代が古いと考えられるが、本書は、室町時代の後期に属し、幾次か繰り返された転写の可能性が強い。

蔵印に「清住禪／院文庫」、「星吾海／外訪得／秘笈」、「宜都／楊氏蔵／書記」(陰刻)「楊印／守敬」(陰刻)(以上楊守敬)、点驗印二種あり。

「留真譜」に著録あり。

(三) 己類

E、室町後期写 三冊

江戸時代に後補した香色表紙を添える。その表紙は裏打を加える。大きさ二七・三×一九cm。楊氏肖像を添付。副紙に室町頃の本文同筆による「歴代歌」「史記韓詩外伝」と題する抜き書きがある。何晏の序を冠し、巻頭は、

「学而第一 何晏集解 凡十六章」のように題する。但し、章数は八佾篇までで、それ以降は無い。首行は、

「子曰学而時習之不亦說乎 馬融曰子／者男子通」（馬融以下は小字双行）で始まり、「説」に作るのは、清家本の系統であるが、「孝弟」「孝悌」の両方を用いるなど、清家本と正平版系本の混合が見えるが、本文書式から、主体は正平版系のテキストであろうと推測される。

書式は、四周单边、有界、每半葉八行、毎行十五字、界幅は二cm、匡郭は二二・一×一五・五cm。柱には「論之一丁付」と巻首にあり、本文第二葉以降は丁付のみで、第一冊が、序から通して、三十二まであり、第二冊以降は柱には何も記さない。

本文の書写は一筆で、書き入れはそれとやや時代が異なるもので、返り点・送り仮名・縦点・附訓が墨で、朱のヲコト点・朱引きが加えられ、他に墨筆の音注、補説、仮名交じりの欄外補説がある。補説は「論語義疏」「論語注疏」を引く。また、「イヘノ本」（家本）の校合もあり、博士家系統のテキストとも引き比べている痕跡がある。紙質は薄手の楮紙で、横紋がある。総裏打を施す。尾題は、「論語一之終／経一千四百七十字 注一千五百一十三字」に作り、

但し、巻四・七・八・九には経注字数が無い。

字様は、斯道文庫蔵永祿三年写本や同蔵戒光院本等によく似ている。正平版系統のものに清家本の伝本の要素が加わったものと考えられる。紙質はまた、D同様、富岡鉄斎旧蔵本によく似ている。

蔵印に「弘前医官洪／江氏蔵書記」（洪江抽斎）、「問津館」「森／氏」（共に森立之）、「星吾海／外訪得／秘笈」「京都／楊氏蔵／書記」（陰刻）（以上楊守敬）、点驗印二種あり。

「経籍訪古志」所載の容安書院所蔵旧鈔本がこれに相当する。また、「留真譜二」に所収。

（四）庚類

F、永正十二年（一五一五）写 卷九・十享祿二年（一五二九）写 卷九・十は清家系か 三冊

白色に金色の網目模様を施した近代の表紙を後補する。大きさは、二四×一七・四cm。楊氏の肖像を付添する。何晏の序は巻二の末に付綴する。巻頭は

「論語卷第一 学而／為政 何晏集解」と題し、次行に「論語義疏」の、一章の総括文を混入する。すなわち、

「学而第一 論語是此書摠名学而為第一篇別目／中間講說多分為科段侃昔受師業目／」と「論語……」以下学而篇の意義をまとめた一文を小字双行で加える。二十篇全てにわたって同様に作る。更に、本文は、

「子曰学而時習之不亦悦乎 馬融曰子者男子通稱／也謂孔子也王肅曰時」（馬融以下は小字）と始まる。「論語義疏」混入本の典型である。但し、巻九く十（陽貨十七く堯曰二十）は別手のテキストを補配したもので、義疏は混入しな

い。すなわち、

「論語陽貨第十七 何晏集解」と題し、

「陽貨欲見孔子々々不見……」と直ちに本文が始まる。あるいは、博士家系統のテキストか。

書式は、四周単辺、有界、每半葉八行、每行二十字、匡郭は二〇・五×一五・五cm、界幅一・九cm。柱には何も記さない。卷九・十の補配部分もだいたい同じである。紙質も共に楮紙。本文への書き入れは、返り点・送り仮名・縦点・附訓を墨書で、朱引き、また朱で句点を加える。いずれも、本文書写時と同じ頃かと想像する。また、江戸時代の筆になる書き入れもあり、「師曰」「朱注大全」「梅尾本」「足利本」「修善寺本」「天授藏本」などの校異や補注を加える。尾題は「論語卷第一〜十」とし、卷九末のみ「論語卷之十八」とする。

卷六末に

「永正拾貳年五月一日 付与曇 宗穩」

卷八末に

「永正拾貳年五月一日／付嘱曇 宗穩」

と本文同筆の奥書がある。

また、卷十末には

「享祿第二戊丑臘月三日、依奥賢所望奉賀書之 七十五才

不堪老暘慚愧々々注有不審不及私用捨任本書了

仰後勘耳」

と巻九・十本文同筆の奥書がある。更に、その後に、本文とは別筆で、

「右此本修善寺中坊永運求之二十六才時読之了

授到大坊先住尊印御房也／天正十七年庚寅弥生中旬」

とある。

すなわち、巻八までは永正十二年書写、巻九以下は享祿二年書写であることが知れ、天正十七年（一五八九）の感得識語が記されていることがわかる。

巻十の後表紙には「友棧館鳥山／雛嶽主人」の所持者墨署がある。

蔵印に、「星吾海／外訪得／秘笈」「宜都／楊氏蔵／書記」（陰刻）「楊印／守敬」（陰刻）（以上楊守敬）、点驗印二種あり。

諸書目に著録無く、楊氏が発掘した古鈔本である。

G、室町後期写 欠序 斯道文庫現蔵・南葵文庫旧蔵本と同種 足利学校系 五冊

後補の縹色表紙。大きさは二五×一七・五cm。書き外題あり。「円珠 論語幾」と。円珠とは室町時代の「論語」の異名である。「論語義疏」の皇侃の序文に「物に、大なれども普（あまね）からず、小なれども兼ね通ずるものあり、譬えば、巨鏡は百尋なれども照らす所、必ず偏なり、明珠は一寸なれども六合を鑑包せるがごとし。論語は小なれども円通なること明珠のごとき有り、諸典は大なれども偏に用いること譬えば巨鏡のごとし」とあるのによる。円通明珠を略したものである。「論語義疏」が混入したテキストには往々この外題を冠している。

楊氏肖像を補添し、何晏の序は欠く。義疏混入本の章数を加えない、この庾類には、何晏の序を欠くものが少なくなく、斯道文庫所蔵の林泰輔旧蔵本(09116)・南葵文庫本(09111)・舜政本(092152)などは同様である。巻頭は、「論語卷第一 何晏集解」と題し、次行に

「学而第一 論語是此書摠名学而為第一／篇別目中間講説多分為科段」と、「論語……」以下学而篇の意義をまとめた一文を小字双行で加える。第二以下も同じ。本文首行は、

「子曰学而時習之不亦悦乎 馬融曰子者／男子通称也」(馬融以下は小字双行)と始まる。

書式は、四周单边、有界、每半葉九行、毎行十六字。柱には何も記さず、匡郭は一七・五×一三・五cm、界幅は一・七cm、上層は四・五cm。本文書写は一筆で、右上がりやや堅く、略字が多い。この風格が、斯道文庫所蔵南葵文庫本とよく似ている。紙質も薄手の斐楮交漉紙で、墨乗りが良く、これも南葵文庫本に良く似ている。上層を作る書式などからも、足利学校系の写本と考えられる。上層には本文同筆の補説が少々加えられる程度で、ここに講読のメモを書き込むはずであった。本文には、書写同筆の書き入れが、返り点・送り仮名・縦点が墨筆で、また、朱引きが加えられる。尾題は「論語卷第一」。

蔵印に「九雲(陰刻)」、「星吾海／外訪得／秘笈」、点驗印二種あり。また、各冊末に「法／得」の鼎型印あり。諸書目に著録無し。

日、日本室町末期写 念河蔵書 二冊

江戸時代初期頃と思しき栗皮表紙を添える。大きさは、二六・四×一九・五cm。楊氏肖像を加える。何晏の序を冠

し、巻頭は、

「論語卷第一 何晏集解」と題し、次行に一格を下げ、

「学而第一 論語是此書摠名学而為第一篇／別目中間講說多分為科段侃昔」と、「論語……」以下学而篇の意義をまとめた一文を小字双行で加える。二十篇を通じて同様である。本文首行は、

「子曰学而時習之不亦悦乎 馬融曰子者男子／通称也謂孔子也」（馬融以下は小字双行）で始まる。この形式は、各篇題が低一格であるのを除けば、Gと同様である。

書式は、四周単辺、有界、每半葉八行、每行十八字、匡郭は一八・七×一三・二cm、界幅は一・七cm、上層は四五cm。上層への書き入れは無く、本文には、本文同筆の訓点（返り点・送り仮名・縦点・附訓）を墨にて加え、同じ頃の朱引き・朱点もある。また薄墨による、その訓点を訂正する手もある。紙質は薄手の楮紙、尾題は、「論語卷第一～九」で巻十のみ「論語卷第十 經一千二百二十三字／注一千一百七十五字」と経注字数を小字双行で加える。

字様は小さく軽い。軟体で略字が多い。書式から見て、これも足利学校の系統を引く写本であろうと考えられる。また、字の風格、紙質、表紙、など、斯道文庫所蔵の慶長十五年写本（092152）（これは首に章数を加える「辛」類に属す）と頗る似る。

蔵印に、「念／河／蔵書」、「星吾海／外訪得／秘笈」、「京都／楊氏蔵／書記」（陰刻）（以上二顆、楊守敬）、点驗印二種あり。

諸書目に著録が無い。

(五) 庚類変型

I、室町後期写 存卷一・二・九・十 林学斎旧蔵 二冊

江戸時代前期頃の朱色表紙、これは後補と思われるが、題簽は古紙に「論語集解」と墨書する。綴じは楊氏のころ、包角を加え康熙綴じにしている。大きさは、二八・七×一九・七cm。全丁、台紙に本紙を貼り付ける。本紙の大きさは二五・二cm。表紙内側に原表紙であろうか、古い縹色の古表紙を遺す。楊氏肖像を加える。何晏の序を冠する。但し、序題は無く、「序曰」と序の本文が始まる。巻頭は、

「論語卷之第一

学而第一 何晏集解」

と題する。卷二・十は「之」字が無く、卷九はこの題が無い。本文首行は、

「子曰学而時習之不亦悦乎 馬融曰子者男子ノ之通称謂孔子也」(馬融以下は小字双行)で始まる。

この形式はFGHに見る「論語義疏」の影響を蒙る義疏混入本の形でありながら、章題の総括文が削去されているもので、Jとともに楊氏所蔵本のみに残るテキストである。「学而」最終章、「不患人之不知」の一文に「王肅曰……」の注が存するなど、本文の随所に義疏系の異同を見る。こうした庚類の変型の存在は、室町時代、正平版論語・「論語義疏」の影響を受けながら、経流や武士の間でテキストを使いやすく読みやすくするため、解りやすい注解を求める反面、簡便な形をも求め、積極的に形を変えて吸収していった状況を物語っているのであって、当時の「論語」講

読の勢いを感じさせる伝本である。

書式は、四周単辺、有界、每半葉七行、毎行十八字、匡郭は二一×一四・三cm、界幅は二・二cm。書き入れは、本文同筆の訓点（返り点・送り仮名・縦点・附訓）を墨にて加え、同じ頃の朱引き・朱点もある。附訓はゾ式の中世講義体である。紙質は楮紙である。尾題は、「論語卷第一終 經一千四百七十字／注一千五百一十字」と小字双行で經注字数を附す。但し、卷二は尾題無く、卷九・十は經注字数を添えない。

字様は軽く、略字が多い。室町時代後期、天文・永祿頃（一五三二〜一五六九）の書写かと推定する。

蔵印に、「溝東精舎」（林学齋_{II}第十二代大学頭、一八三三〜一九〇六）「星吾海／外訪得／秘笈」「京都／楊氏蔵／書記」（陰刻）「楊印／守敬」（陰刻）（以上楊守敬）、点驗印二種あり。また、第一冊末に「持主明印」、第二冊末に「明印」と朱の署名がある。

諸書目に著録が無い。

丁、室町後期写 足利学校系 一冊

空押出つなぎ茶色艶出表紙。後補であろう。大きさは二五×一七・五cm。楊氏肖像を加える。何晏の序を冠す。この序には「論語義疏」が序の全文に附載されている。序に義疏が混入しているのは、他に例を見ない。巻頭は

「論語卷第一 何晏集解

学而第一」と題し、Iと同様、「論語義疏」の影響を受けるテキストの形式である。二十篇を通じてこのように題す。しかし、この伝本は変型である。義疏の一章総括文が削去されているが、本文と同筆で、「学而第

一」の下に、「論語是此書摠名学而為第一篇別目中間講說多分為科段……」という義疏の注釈が後に書き加えられているのである。二十篇を通じて書き加えられているのである。従って、本テキスト成立の由来は、Iの如く、義疏系の写本をもとに、義疏の煩雑を避けて改編したテキストに、講読時にその参照として再び義疏を用いて、書き加えたものと考えられよう。室町時代の漢字に志すものが、どんな志向を持って「論語」のテキストを作り、読んでいたか、苦心の様子が感得できよう。本文首行は、

「子曰学而時習之不亦悦乎 馬融曰子者男子之通稱謂孔子也王肅曰時（馬融以下は小字双行）で始まる。

書式は、四周単辺、有界、每半葉九行、毎行二十字、匡郭は一八・一×一四・三cm、界幅は二cm、上層は三・八cm。朱のヲコト点・声点を加え、墨筆の返り点を施し、送り仮名・附訓は少ない。上層は補注が多く、数人の手が入っている。また、江戸時代後期の書き入れもあり、「純曰」（太宰春台の説）「茂卿曰」（荻生徂徠の説）などを書き入れている。

上層を持つ書式などから、足利学校系の写本であることは疑いが無い。書体は略字が多く、紙質は楮紙で、室町時代後期、特に、足利学校系写本に見る典型である。尾題は「論語卷第一〜十」。

巻四・六尾題の後に、「岩村（禱）真（傳）助／如月和尚御遺稿 全部三冊之内」「（）内は巻六」と墨書あり。

蔵印に、「向黄邨／珍蔵印」（向山黄村）、「伊澤／信実」「明誠堂／伊澤氏／蔵書記」、「星吾海／外訪得／秘笈」「京都／楊氏蔵／書記」（陰刻）「楊印／守敬」（陰刻）（以上楊守敬）、点驗印二種あり。

結 語

以上、楊氏觀海堂の蒐書の意義と、その古鈔本『論語集解』の文献学的意義を、その関連性に視点をおいて論じたのであるが、無論、楊氏の『論語』蒐集は、『義疏』『正平版』また、慶長刊本、宋刊本、など多岐に亘るわけで、『集解』本のみでその意義を総括することはできない。しかし、現存する全ての古鈔本『論語』、それをとりまく刊本・写本の全体像を簡便にまとめ、中世期『論語』受容の理解を普遍化するのが、本研究の目的であり、本稿はその重要な一部分をなすものであるから、特に、ここに室町期の古鈔本を抽出して整理・解説を行ったわけである。類型化と多様化という二面性を保ちながら、古く伝わったテキストが、読まれ変化してゆく書物文化の連続性が、古鈔本『論語』を通じて目の当たりに理解できることを、近代に、いち早く知った楊守敬の炯眼に、敬服しないわけにはゆかない。